現れるか否かを実験するだけの勇気はまだない。われわれは「食べる」ということばの中に当然「嚙む」ことも含めているが，ネパール人のことばでは両者は別にされているのではあるまいか。もっともここで「現地の人」としたのはチベット系ネパール人で，風俗習慣はインド系ネパール人とはずいぶん違うが，石粒の混った食物を楽々と食べるという点は共通である。

こういう微妙な習慣の差がドクウツギを食用植物にするか，有毒植物の筆頭にするかの差に現れているのではないかと考えた。ドクウツギ属は Index Kewesis によると前記 4 種のほか18種も記録されているから，毒性の強弱はあるにちがいない。

The ripe fruits of *Coriaria nepalensis*, achenes and perianths together, are eaten by local people in central Nepal with caution that they should not be chewed, while *C. japonica* is known as one of the most poisonous plants in Japan.

(国立科学博物館)

○東京都清瀬のヒナワチガイソウ（山崎　敬） Takasi YAMAZAKI: *Pseudostellaria heterantha* Pax var. *linearifolia* (Takeda) Nemoto in Kiyose, Tokyo

ヒナワチガイソウは武田久吉氏が筑波山から大正 4 年（1915）に報告したが，その後ほとんど認められなかったものである。最近鈴木昌友・萱野千寿氏が筑波山のものに基づいて詳細な調査の結果，変種として認めるべきであると結論している（本紙 61 : 148, 1986)。筑波山と清瀬にのみ生育する稀少植物である。清瀬のものは初め檜山庫三氏が採集し，新種ムサシワチガイソウとして発表（1951），武蔵野植物記（1953）にはその名で図示されている。後にヒナワチガイソウと同じものであることにきづき，武蔵野の植物（1965）にはヒナワチガイソウに変更してある。その後ほとんど採集した人はなく，清瀬市で編集した「清瀬の自然」(1986) には 1952 年に撮影した写真がのせられ，その後見た人がいないと記されている。本年 4 月，清瀬の自然を守る会の嘉数雅章氏から発見したと知らせて下さったので，4 月13日に現地を訪れた。自生地は柳瀬川に沿った低地で 5 米四方ぐらいの所に20株ほどはえていた。落葉樹林下の腐葉土の堆積した適度の湿気のある場所である。葉が細いだけでなく，花弁が披針形で先が尖る点でワチガイソウとは異なり，変種として区別するのが妥当であると思う。この場所は人家のそばで，何時まで健在であるのか心もとない状態である。幸いに清瀬の自然を守る会の方々が熱心なので当分は大丈夫と思うが，ヒメザゼンソウやマルバダケブキの様に清瀬から姿を消してしまったものの二の舞いとならない様努力しなければならない。本種を観察する機会を作って下さった嘉数雅章・宮沢とよ美氏に御礼申し上げます。

(東京大学 理学部附属植物園)